

## 植民地朝鮮における音楽文化のトランスカルチャー

### —京城放送局 (JODK) 音楽番組を事例に—

金 志善 (日本学術振興会特別研究員 RPD・東京大学)

京城放送局 (JODK) は1927年2月16日に開局し、「報道」「教養」「慰安」を原則としたプログラムを編成していた。特に「慰安」放送では、音楽、漫才、ラジオドラマなども盛り込まれ、中でも音楽プログラムは最も多く編成されていた。ラジオ放送は、既存の音楽の普及、新たな音楽ジャンルの生成、様々な音楽の統合などにより音楽環境の劇的な変化をもたらし、音楽の大衆化においてもその役割を果たした。

京城放送局は、1933年4月26日に日本語と朝鮮語の二重放送が始まる前までは、単一放送で日本人向けのプログラムと朝鮮人向けのプログラムが交互に編成されることによってダイグロシアの環境に直面することになる。音楽プログラムは日本音楽、朝鮮音楽、西洋音楽、大衆音楽、中国音楽などで多様に編成されていた。植民地朝鮮では、近代的消費志向が大衆文化を作り上げており、この時期ラジオを通じた様々な消費文化が生まれていた。人々は映画、ラジオドラマ、漫才などの余暇生活を娯楽として享受するようになり、中でも音楽の場合、新民謡、流行歌のような新たなジャンルが結合し生成する中で、音楽消費が大衆化することにラジオ放送は大きく寄与した。

日本による一連の強制的な政治的統制政策や同和政策の影響があるものの、このようなラジオ音楽放送では朝鮮人の音楽文化の自律性が保たれたといえる。このような音楽文化は、当時の朝鮮人の音楽文化生活に大きな変化と発展をもたらしたのである。

本発表では、このような状況を踏まえ、京城放送局ラジオ音楽放送からみる音楽文化のトランスカルチャー (越境文化) に焦点を当て、その実態を明らかにし、音楽文化のトランスカルチャーにおいてラジオメディアが持つ意義について考察する。